

Thomas Hardy と〈教養〉小説

坂田薫子

19 世紀ヴィクトリア朝のイギリス小説の形であると多くの研究者たちが定義する教養小説は、トマス・ハーディの『日陰者ジュード』(1895 年)で終わりを告げる、あるいはハーディの著した小説は反教養小説であると断定する論文がいくつも存在している。例として『ジュード』と教養小説の関係について研究した論文でよく引用されるジョージ・レヴァインの明解な主張を紹介すると、レヴァインは『ヴィクトリア朝小説の読み方』の第 4 章で、まず教養小説に次のような定義を与えている。教養小説とは新しく登場した中産階級に所属する若者の成長記であり、19 世紀、それも特にヴィクトリア朝ならではのものである。主人公の歩む人生は伝統的な社会から近代的な社会へ、それも資本主義へと変化する社会の中でしか経験できない人生であり、主人公は伝統に反発しつつ、折り合いをつける、別の言い方をすれば、幻想から目覚め、社会上昇を果たすことで成長を遂げることが叶う。こう定義したうえでレヴァインは、資本主義によって生まれた新しい社会における階級移動の可能性を肯定する、いわばヴィクトリア朝という社会でなければ生まれてこなかったイギリス教養小説は、ハーディが『ジュード』を執筆したころにはすでに「ヴィクトリア朝的な『成長』が「自然消滅して」いる以上、「実質上、存在し得ないものになって」おり、『ジュード』は「ヴィクトリア朝の最後の教養小説」、あるいは「反教養小説」と呼ぶことができると主張している。

実はイギリスにおける教養小説とはどういう小説なのかについての定義は曖昧で、フランコ・モレッティのようにヘンリー・フィールドिंगの『トム・ジョーンズ』(1749 年)から議論を始める研究者がいる一方で、グレゴリー・キャッスルのようにモダニズム文学を議論の対象とする研究者もいて、時代区分を見るだけでも多岐にわたっている。しかし、多くの研究者が拠り所としたり、出発点にしたりしているモレッティの研究書『世の習い——ヨーロッパ文学における教養小説』は、ヨーロッパの 19 世紀小説をその研究対象としているため、イギリス文学全般ではなく、イギリス 19 世紀文学にその範囲を限定した事典のうち、最も手短かにまとめているジョン・サザーランドの『ロングマン版ヴィクトリア朝小説の手引書』の「教養小説」を参照してみると、サザーランドは「イギリスにおける教養小説の流行は 1840 年代と 50 年代にあった」と定義している。これは言い方を変えれば、イギリスの教養小説の流行は 1850 年代で終わったということになる。では、なぜ 1850 年代でその流行が終わってしまったのかと言えば、それは、ダーウィニズムによって、「ヒーロー、ヒロインの道徳的成長」、「試練を通しての道徳教育」は本当に果たし得るのだろうか、それまでの教養小説が掲げてきた価値観が疑問視されるようになったことに一因があるのだろう。

そこで、ここでダーウィニズムがハーディに与えた影響について簡単に確認しておこう。自然に囲まれた幼少時代を送ったハーディは、自然の進化、退化の過程を自らの目で観察し、自然界には冷酷な「意思」が働いていると考え、それを自らの作品内で「宇宙の内意思」、「運命の支配者」などと名付けて描写する。時間と偶然に支配された無情な世界が描かれる彼の作品では、登場人物たちがこうした「意思」に弄ばれ、負けるとわかっている戦いを挑み、露と消え果てていく。こうした世界観が描かれるハーディの小説では、理性は必ずしも役に立たず、自助努力は報われないため、いわゆる教養小説が成り立たない。果敢に戦いを挑んだ登場人物は多くの場合死を迎え、ずる賢く環境に適応した敵役たちが生き残るハーディの小説では、サザーランドによる「教養小説」の定義にあった「道徳的成長」は描かれ得ないわけだ。

では、ハーディ小説を、その中でも特に『ジュード』を反教養小説と見なす多くの研究者たちは、なぜハーディが反教養小説を描いたと考えているのか、言い換えれば、ハーディが、彼らが反教養小説と見なす『ジュード』で主張したかったことは何だと考えているのだろうか。例えばキャッスルは、『モダニスト教養小説を読む』の第 2 章で、教養小説全盛期に可能であった、教育を通しての自己啓発と社会上昇は、教育の差別化により、1890 年代にはローワーミドルクラスやローワークラス、それも田舎出身の若者には果たし得なくなり、モダニズム時代の教養小説はそれを認識できずに失敗していく主人公たちを描くことで、古典的教養小説と、それが理想と掲げる実利的な教養を批判するという、いわゆる教養の否定、批判の場となることがあったと指摘している。キャッスルはジュードの悲劇もその一つと見なし、ジュードの悲劇は、当時広く受け入れられていた「社会化」の形態と古典的な成長の在り方の理想像を疑問視させる役割を果たしていると主張している。

こうした論文からもうかがえるように、研究者たちはこれまで様々な読解法で『ジュード』の反教養小説性の意義を解き明かしているが、そもそもハーディはこうした研究者たちが主張するように、何らかの批判精神を持って、当初から反教養小説を書こうとしていたのだろうか。ハーディは 1888 年に発表した「小説の有益な読み方」で、「最も道徳的な利益をもたらす小説は、教訓を伝えようという目的を持たずに書かれた小説群

の中に存在しているようだと主張することはどこか逆説的に思われるかもしれない」と、そして「読み手に運命——その運命が公平なものであろうと、不公平なものであろうと、うらやむべきものであろうと、残酷なものであろうと——を切り開く際の性格と環境の必然性を印象付ける小説は、必ず健全な効果——たといわゆる良い効果ではなかったとしても——を健康な精神に対して持つに違いない」と述べている。教養小説の世界というのは、ステレオタイプ化を恐れず、敢えて分類するならば、勧善懲悪の世界を描いていると見なすことができる以上、いわゆる教養小説は、いわば道徳や教訓を伝えようとする小説と見なすことができる。すると、こうした彼の主張から、ハーディは真の意味で読み手を考えさせることのできる小説とはいわゆる教養小説ではないと考えていたことになり、彼は、登場人物の性格と彼らの置かれた環境、そして彼らの運命について論じる、宿命論的世界観を描く自らの小説のスタイルの方が、人生について読み手に考えさせることができると信じていたことが推察される。つまり、彼は登場人物たちの悲惨な人生を煽情的に描き、この世は生きる価値がないのだと読み手に伝えたかったのではなく、敢えてこうした暗い小説を描くことで、読み手にその中に生きる意味を見出して欲しかったと考えられる。だとすると、彼の小説を読み終えるやいなや、彼にペシミストというレッテルを貼ることは性急な行為でしかないと言わなければならないだろう。上述のハーディの表現を借りれば、「逆説的に聞こえるかもしれない」が、時として研究者たちによって反教養小説として分類されるハーディ小説は、いわゆる教養小説と同じ目的を持って書かれていたのかもしれない。

その一方でハーディは、『ダーバヴィル家のテス』(1891年)と『ジュード』、さらには1912年版のウェセックス・エディションの序文では、自分が書きたかったのは「教訓」ではなく、「印象」なのだとことさら強調する。辛辣な書評に嫌気がさし、ついに小説家としての筆を折るまでになった経緯を踏まえれば、非難をかわすための弁明に過ぎなかった可能性もあるが、これが本音ならば、ハーディは教訓に満ちた教養小説、ないしは反教養小説を書こうという意図はさらさらなかったと見なすことも可能だろう。

最後に、ハーディはその作品に描かれた暗い宿命観ゆえに、存命中から今日に至るまでペシミストと見なされることが多い作家であるが、本当にそうなのかを、二番目の妻の名で出版されてはいるものの、実はハーディ本人が執筆したと言われている伝記『トマス・ハーディの生涯』を「教養小説」として読むことで考えてみよう。彼の小説は宿命論に染まり、悲愴感漂うと言ってもいいほど悲観的な様相を呈しているが、この「自伝」で「主人公」ハーディは、小説世界とは異なり、大した困難に出会うことなく、すいすいと出世街道を突き進む。ハーディは、小説家として世に出るまでの自身については、努力を重ね、経験を積み、社会に順応しながら成長していった姿を描き、小説家として世に出たあとの章では、出来事と人生観を羅列するだけで、そこに人生の苦悩は感じられない。自身の才能を誇りに思い、努力は報われると言いたげな内容は、もしもこれが小説ならば、まさに型通りの「教養小説」と呼んでもいいものになっている。ハーディは自らの小説では、多くのヒーロー、ヒロインには志半ばで悲劇的な死を迎えさせておいて、自分史はいわば成功物語として綴っている。小説の内容は確かにペシミズムに満ちているが、自身の人生を生きる一人の人間としてはオプティミストと言っても過言ではないように思われる。「人間性は徐々に改善される」、「人間は少しずつ気高くなっていく」というのが持論だったと、そして「人が言うほどペシミストではなく、メリオリストである私は、もっと世界を信頼している」と綴っていることから、その小説においては、教養小説とは正反対とも言えそうな筋を追い、個々人の成長にはどこか懐疑的であったものにとらえられるハーディだが、人類全体の成長は信じていたことがうかがえる。そこが、ハーディを、小説家としてはペシミストだが、自身の人生を生きる一人の人間としてはオプティミストとしたのかもしれない。

[引用文献]

- Castle, Gregory. *Reading the Modernist Bildungsroman*. Gainesville, FL: UP of Florida, 2006.
- Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy 1840-1928*. 1962. London: Macmillan, 1965.
- Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. 1895. Ed. Dennis Taylor. London: Penguin, 1998.
- . "The Profitable Reading of Fiction." 1888. *Thomas Hardy's Personal Writings*. Ed. Harold Orel. Basingstoke: Macmillan, 1990. 110-25.
- Levine, George. *How to Read the Victorian Novel*. Malden, MA: Blackwell, 2008.
- Moretti, Franco. *The Way of the World: The Bildungsroman in European Culture*. 1987. New Edition. Trans. Albert Sbragia. London: Verso, 2000.
- Orel, Harold, ed. *Thomas Hardy's Personal Writings*. 1966. Basingstoke: Macmillan, 1990.
- Sutherland, John. *The Longman Companion to Victorian Fiction*. Harlow: Longman, 1988.